

陣幕を捲つて外に出たメリアは、曇天の空を見上げ眉をひそめた。今にも泣き出しそうな重く垂れこめた雲が今の心境を物語っているようで、奮い立たせていた気分が一気に萎えていく。

「將軍」

メリアが出てきたのを見て、下士官が近づいてきた。その表情にも覇気はない。

聞く前から告げられる内容が予想出来て、メリアは零れそうになるため息を危うく呑みこんだ。

「夜間の斥候兵が帰還しました。どの方面も、敵影は発見できませんでした」

予想通りの報告だ。メリアは軽く頷いた。

そもそも、なにがしかの収穫があれば即刻知らせるように命令してある。次の斥候を送り出し、折を見てもたらされる報告は、それ自身が偵察の不首尾を知らせるようなものだった。

「分かった。明朝、引き続き東へ進軍をする。出立の用意をしておけ」

湧き上がる苛立ちを押し殺した声で彼女は命じ、駆け去る兵士から空へと視線を移した。地上へと届かんばかりにその裾を広げる黒雲が行く手を阻む意思を示しているかのように思えて、知らずその表情が険しくなる。

エーヴァルト領に入ってから、すでに十日近くが経っている。そのうち白雕師団と思しき者たちと接触できたのは、三日前に受けたあの砲撃を入れても僅か数度だけだった。

その数度の接触は、すべて相手側からのもの、それもほとんどが不意打ちに近い襲撃だった。

五千の兵に対してたった数十騎、下手をすればほんの数騎の兵が不意に眼前に立ちふさがり、大砲が火を噴く。

爆発はどれもこれも大規模で、赤鴉師団の行く手を阻む的確な砲撃だった。

黒煙を縫って、キースが小隊を引き連れ追撃したこともあった。けれど発見できたのは、大砲を運んだと思われる荷車の深い轍と、十数頭分の馬の足跡だけだった。轍は藪のような獣道を選んで進んでおり、跡を追ったキースの眼前には深い森が立ちちはだかったという。

追って、追い切れる相手ではなかった。森の中で追撃すれば、本隊を発見することは可能かもしれない。だが、地の利がなく視界も利かない深い森に分け入ることは、危険が大きすぎた。どこかで待ち伏せされた場合には、部隊の全滅さえありうるのだ。